

審査の結果の要旨

氏名 坂本篤史

本論文は、小学校校内研修としての授業研究事後協議会を教師の協同的省察による学習過程の場と捉え、1小学校での授業協議会の継続的観察や面接等による事例研究によって、教師の学習過程と関与要因を分析検討した論文である。論文は4部9章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、教師の学習に関する先行研究を整理概括し、授業経験の省察に関わる心理的要因の同定と教師間相互作用を通じた学習過程の分析検討の必要性を指摘し、学習過程に関して検討すべき課題を整理し提示している。続く第2章では、学習過程をとらえる本論文の方法論について、直後再生課題、ビデオ再生刺激面接、研究紀要面接、談話記録分析、ビデオ記録分析、ライフヒストリー面接が、検討目的との関連で論じられる。

第Ⅱ部では、授業協議会の短期的学習過程が検討される。第3章では、241人の小学校研究主任を対象に授業研究実施と同僚性の関連を共分散構造分析により検討し、従来経験的に言われてきた「生徒の学習の事実を話し合う」だけでは同僚性形成の有効性は示されず事実確認や情報共有に留まる可能性を実証的に示し、事実を話し合う過程から省察を深め実践化に至る過程の具体的検討が必要である点を明らかにしている。第4章では、直後再生課題を用いて学校在籍年数の長い教師が協議会で語る授業の問題表象、可能性の想定、代案提示を他教師がより注目して記憶することで、学校内教師文化としての授業理念や授業視点が共有されていることを示している。また第5章では、授業者と非授業者の問題表象過程の比較から、協同的省察により、他教師が語る実践の表象を自身の課題意識を媒介して再文脈化していく過程が生じることを示している。

第Ⅲ部では、長期的な変容としての学習過程が検討される。第6章では、教師7名の研究紀要における語りの経年変化を質的に分析し、授業理念の受容過程の後に授業を見る視点の変化過程が生じることを明らかにしている。続く第7章では、1教師1単元連続授業の省察と実践化過程を検討し、授業者の課題意識に関わるジレンマ場面で、他者の発言を媒介にし、新たな代案が形成され実践化が生じることを明らかにしている。第8章では、1教師の国語科の授業研究を通して形成された実践的知識を検討し、物語文と説明文教材という種類により実践的知識が分化する様相を記述している。

第Ⅳ部では、上記実証研究を踏まえ総括し、授業研究協議会が学習過程に影響を及ぼす下位過程のモデルを提示し、今後さらに検討すべき課題を整理して論じている。

本論文は、授業研究協議会での協同省察を教職専門性の学習過程として、多様な方法を駆使して体系的に取り上げた学術研究論文である。この点で独自性が高く、これからの教師の学習過程研究に新たな視座を提示した論文であると高く評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。